1

草木のうち早いものは芽を出し、生き物たちが上昇する気温に胸を踊らせる。春が本格的にやってくるだろうかという頃、小高い丘にある墓地、そこに一本の桜の木が生えている。その木を囲うように周りと石の壁で区切られ、橋田家と彫られた石が置かれている。この下に彼が、橋田宏和が眠っているのだ。そう思いながら、私は、スーツケースを持っていない方の手で花束を持ったまま、墓石を眺めていた。

6年前の今日、私は電車に乗るため、駅のホームで待っていた。親と喧嘩別れのような形で、広島から東京に出てきて、ずっと仕事をして、仕事をして。一人暮らしに余裕が生まれるはずもなく、起きている時間はほとんど仕事に使った。今思えば完全にオーバーワークだった。その日も職場に行くため電車に乗ろうとしていた。ホームに目当ての電車がきて、乗り込もうとしたところで、足が止まった。動かなくなってしまった。視界の端から、だんだんと霧に覆われたようにボヤけていって、ついに真っ白に、何も見えなくなってしまった。この現象に対する恐怖で声も出せず、吹雪の中、一人取り残されたようだった。

「あのう、大丈夫ですか？」と遠慮がちに声をかけてくれたのが宏和だった。

「具合悪いんですか？駅員さんを呼んできますから、もう少し耐えててください」

きっと、私は限界だったのだと思う。そしてそのとき、限界ラインから何かが飛び出してきて、それに釣られて色々な感情が出てきて、それは涙と嗚咽という形をとって私の外に現れた。いきなりそれを浴びせられた彼はびっくりしたようだったが、すぐに表情を戻すと、

「一緒に行きましょう。歩けますか？」と言って、私に桜柄のハンカチを差し出した。そのまま近くにベンチを見つけ、私を座らせた。

そこで彼は私の話を聞いてくれた。外に出て働くか、農家を継ぐかで親と喧嘩したこと。身寄りのない東京に家出してきたこと。一人で、辛かったこと。そのときの私が一番欲

しかった話相手に彼はなってくれた。

それから宏和とは、時々会うようになった。お互いに金銭的余裕がなく、ほとんどどこかのファミリーレストランやファストフード店だった。たまに、宏和が好きだという植物園に連れていってもらった。そこの植物が感じさせる生命力と、彼が覗かせる笑顔は、深海に放り出された私の心を掬い上げた。

「桜が一番好きな花なんだ」

4年前に彼がそう言ったのを今でも覚えている。それから春には桜の綺麗な場所に二人で出かけることにしていた。去年行った弘前城は、花筏を見にきた人たちでごった返していた。人混みではぐれてしまわないように、彼は私の手をしっかりと握ってくれていて、その温もりは未だ私の手のひらに残っている。その帰路で私たちは交通事故にあった。居眠り運転のトラックが、車線を超えてきたのだ。

助手席に座っていた私は、両腕を打撲、右足を骨折した。運転席の彼は頭を打ってい て、私より重症だった。すぐに救急車を呼んだが、間に合わなかった。私だけが生き残り、宏和と、運転手は死亡。宏和が最期に見た景色の大半が私で埋め尽くされていたことは、彼にとって幸せだったのだろうか。

葬式が終わってからというもの、何をするにつけても彼の姿が浮かぶようになった。例えば、ご飯を食べていると、向かいの席に彼はいる。例えば、テレビを見ていると、隣りで彼も一緒に見ている。例えば、桜を見ていると、彼は私の手を引いてくれるのだ。それは私が見るはずだった景色なのだ。やり場のない怒りや、恨みが日ごとに募っていった。しかし、日常にある宏和の残滓を追いかけるうちに、行き場を失った感情は無気力に置き換わり始めた。それでも、いるはずのない彼の姿を、声を、感触を求めてしまう。もはや私の心は彼以外の何者にも動かすことができなくなってしまった。

私は彼に縛りつけられている。私が宏和を想うばかりに、彼も私を縛りつけざるを得ないのではないか。きっとそれは二人がもう一度一つになるまで続いていくのだろう。死者が蘇ることなどないが、生きている人が死ぬことはできる。そういうしくみになっている

から、墓地は人でごった返しているのだろう。一体一日で何人もの人がそこを訪れることになるのか。今度は私が手を引かなければならない。今までいた人と、新しくきた人の混ざった群衆の中から、宏和を見つけ出して

「ごめんね。待った？もう離れないから」と彼の手を強く握りしめるのだ。風に吹かれ、一ひらの桜の花びらが私の手に落ちた。この桜が、彼が埋まっている桜が、手がかりになって、道標になってくれるはずだ。

私は花束を墓石の上にそっと置くと、スーツケースから折りたたみ式の脚立を取り出し、組み立てて踏み台にした。登って、簡単には折れそうにない太めの枝にロープをくくりつけ、輪を作った。掴んで、首をかける用意をする。準備が整ったときには、心臓が早鐘を打つのが聞こえていた。太い枝だが、みしり、と嫌な音が聞こえる。早く済ませてしまおう。そして輪に首をかけた瞬間、めきり、と一際大きな音が墓地に響いた。私は膝から落ち、少し擦りむいていた。ずっとぶら下がっていたいのに、落ちる。呆気なく地面に膝をついた私は、散った桜の花びらのようであった。折れた枝が背中に落ちる。背中をなぞる。そのとき感じたのは、ゴツゴツした木の感触ではなく、幾度も私の肌に触れた彼の手の温もりだった。

彼がまだ、そばにいる気がして、「ごめんね」と言われながら背中をさすられたようで、報われたような、救われたような、全て預けてしまえるような、どろどろとした温かい感覚に包まれた。泣いた、泣き喚いた。音に気づいて管理人らしき人物がこちらに近づくのが見える。